

ISSN 0286-1968

河上肇記念会報

NO. 33

1989・9・20





目次

河上肇生誕百十周年記念 講演会のご案内	(1)
『近世経済思想史論』とその時代……和田洋一	(2)
『全集』以後(七)……………杉原四郎	(10)
中国訳目録稿(五)……………一海知義 米浜泰英	(16)
追悼 大塚英子さん……………小嶋康生	(24)
井上喜代松氏をいたむ……………沖本 彰	(26)
編集後記……………	(27)

河上肇生誕百十周年記念講演会御案内

日時 一九八九年十一月十一日（土）午後一時三十分～五時

場所 京都大学法経第二教室（時計台下）

開会の辞

河上肇生誕百十周年と京大経済学部七十周年によせて

いま『貧乏物語』を読む

河上肇とその生と死の葛藤

閉会の辞

河上肇記念会世話人代表

杉原 四郎氏

京都大学経済学部長

尾崎 芳治氏

京都大学経済学部教授

池上 惇氏

立教大学経済学部教授

住谷 一彦氏

河上肇記念会事務局代表

大門英太郎氏

共催 河上肇記念会

東京河上会

山口河上会

京都大学経済学会

本会の一九八九年度総会は、右記の記念講演会をメインとし、次の行事により替えさせていただきます。

十一月十一日の当日、午前十時半より法然院のお墓参りをし、京大の講演会終了後の午後五時過ぎより京大楽友会館にて記念パーティ（会費：四千元）を開催いたします。

多数会員諸兄姉の御参加をお願い申し上げます。

なお、御出欠を同封ハガキにてお知らせ下さい。

河上肇記念会総会事務局

『近世経済思想史論』とその時代

和田 洋 一

私は昭和二年から京大で学んだ。法律や経済といった固苦しいのはニガ手であるので文学部に入った。今日も固苦しい学術講演ではなく気楽な話をさせていただく。

私は同志社大学で四十年近く先生をしてきた。その同志社では創立者の新島襄を持ち上げて、持ち上げて新島精神をうるさいほどう。もう、いやになるという学生もいたし、私も同志社中学のころ、また新島精神かと思っ

た。

同じことは河上会でもいえるのではないか。この会が河上先生を持ち上げすぎると、若い人がこなくなる心配がある。今日は若い人も多くおられるので内心、喜んで

いる。

さて、河上さんを口にする時、どういう呼び方をすべきなのか、少し戸惑っている。河上先生という言い方があるが、文学部のボクは直接の先生ではなかった。といっ

て敬称をつけないのは失礼に思っていたが、先ほど私の隣の杉原四郎先生は敬称抜きで話された。呼びすてでいいのであろうが。私は「河上さん」ということにする。

本題に入るが、ここに一冊のボロボロの本を持ってきた。河上肇著の『近世経済思想史論』である。この本を一九二三年（大正十二年）、キリスト教の先輩が私にくれた。そのさい彼がいったのは「和田君は文学の本だからキリスト教の本しか読まないようだが、たまにはこういう本を読んでみる。これを読むとマルクス学説がわかり易く書かれているよ」と。それで私は、ニガ手と思っ

たが折角、先輩がくれたもので、読まぬわけにいかん。しばらくしてからだが、こういうきっかけで河上さんの本を初めて読んだ。

ところで、京大の正門は南側にあり、その筋向かいに旧制三高の正門があった。その三高の東側に小さな門が

あって、その門を出て少し行くと河上先生の家があった。その手前に喫茶店、当時はミルクホールといったが、喫茶店があり、三高生はコーヒーや紅茶を飲みに行ったものだ。その喫茶店にいと、河上先生が自宅から出てこられるのがよくみれた。

私は一度、路上で河上さんからジロリと見られたことがある。薄汚い三高生とみられたであろう。河上さんには私が何者であるかご存知もなかったが、偶然目と目とあった、その時のことは今でもはっきり覚えていて。その時も河上さんは和服と袴姿であった。

京大では経済学部の授業は聞かなかったが公開講義をされていたので、文学部の学生である私も先生の顔みたくさで出かけていった。法経の大教室は河上先生の話という左翼学生がワッと集まる。そして熱狂的な万雷の拍手で先生を迎える。恐らく、その中には大門英太郎君（河上肇記念会世話人）もいたであろう。

京大をやめられてからは衆議院議員選挙に出られたが、その時は下鴨の小学校で開かれた演説会を聞きにいった。そのていどのおつきあいであったが、以来、河上さんには親近感をもっている。

その親近感を作った最初の出会いが、この汚い本とい

うわけだ。

この本を読んで驚いたことはマルクスの名前が何回も何回も出てくる。それに対してエンゲルスはさっぱり出てこない。奇妙な事だ。マルクスはファースト・バイオリンで、エンゲルスはセカンド・バイオリンといわれたりはするが、これはエンゲルスが謙遜しているまゝでだ。双方とも、どちらも偉いと思っていた。

マルクスの名前があまりでてくるので、実は昨晚、数をかぞえてみた。なんとマルクスは二百二十四回。エンゲルスはたった一回しかでてこない。

二二四対一、これは河上さんがエンゲルスを勉強してなかったのか、それとも好きではなかったのか。私はわからない。東独では膨大なマルエン全集が出されている。マルクス主義でなく、マルクス・エンゲルス主義という呼び名がいいという声も聞くほどだ。

二百二十四回といったが、「彼は……」という人称代名詞も使っており、それらを加えると三百回になる。この本はマルクス伝ではないのだ、『近世経済思想史論』なんだ。エンゲルスの影が薄すぎる。

このこと自体、たいした事ではないのだが、私が八十歳を越えてから河上さんの本を読んでいると、立派な先

生に違いはないがなにか物足りないところもある。物足りないところを話すと、河上さんにケチをつけるようであるが少しは言った方がよいであろう。十中八、九は立派だが、その先生も弱点もあったということ、それを皆様に知ってもらうことはいいのではないかと思った。

その一つは、この『近世経済思想史論』では「階級闘争（以下、階級闘争）」の事を熱心にいっておられる。そして、マルクス、エンゲルス二人が起草した『共産党宣言』の紹介があるのだが、ここでも河上さんはマルクスの『共産党宣言』といっておられる。これまた不満である。

この『近世経済思想史論』はいろいろ疑問があると共産党の方にいうと、この本は河上さんの本のうち初期のもので程度が低い、もっと年をとってからの本を読まなといいかんといわれた。それはそうであろうが、大正時代の河上さんは共産党宣言を読んで強い衝撃を受けられた。そして、そのまま受け入れられた。

私は、それまで階級闘争など考えてもいなかった。しかし、その本を読み、なるほど、そういえば、そうかもしれない、と思った。一方で資産家階級、もう一方で無産者階級（労働者階級）、この二つが闘っている。そして、

労働者階級が勝利をえることで世界中がガラリ変わるのだと。マルクス、エンゲルスは、そう考えて『共産党宣言』を書いた。

しかし、そこに今までの歴史は、すべて階級闘争の歴史であると書いてある。これには幼稚なボクも理解できなかった。

階級闘争を否定はしないが、階級闘争だけでもないであろう。国と国の戦争、民族と民族の戦争、キリスト教ならカソリックとプロテスタントの闘争があった。キリスト教というと平和な宗教にみえるが宗派間でものすごい殺し合いをしている。一晩で三十万人も殺したりしている。仏教も宗派の争いがあった。強い民族が弱い民族をいじめる歴史。それだけでなく腕力の強い男性が弱い女性をいじめる歴史もあった。

歴史にはさまざまな闘争があった。それをマルクス、エンゲルスは階級闘争ばかりをいう、なぜ、こうなったのか。今日なら罔りの友人に「おかしいのと違うか」というが、クリスチャン学生は議論を好まぬということもあり、心の中で納得できないと思った。

河上さんは共産党宣言を読んだ、そこで、よく、考えてほしかった。しかし、マルクス、エンゲルスは偉い

学者と決めてかかり、ともに受け入れられた。と今思っている。この点、河上さんは、その自叙伝の中で、大正時代のあの頃は自分は幼稚であつたし、日本の学界も幼稚であつた、といっている。私も学生時代を省みて、幼稚だつたと思う。

ボクはドイツ文学だつたが、ドイツ文学の先生は、「ベルリン大学の某某は…」とか、「ハインデルベルク大学のグンドルフ教師は、この中にこういう事をいつている」と紹介ばかりしていた。自分の意見はとなると、有るのか無いのか何ともいわない。われわれ学生は、先生はよく本を読んでいると感心して聞いていた。

ボクがドイツ語を教わつたのは京都帝国大学の尊敬するグンベルナー先生。その先生が自分の意見をいわない。河上さんのいわれる通り、あの頃の学界、思想界は幼稚であつたのだ、河上さんは謙遜していわれたのではなく、本当に幼稚だつたことが自分の体験からいえるのだ。

そのころ、日本の学者はドイツといえば偉い人だ、学問的、思想的に深い人だ、という先入観念があつた。私も、日本は後進国だから先進国の言葉を勉強せねばと思ひ、ドイツ語をやつた。

河上さんも、そういう時代の子で、マルクス、エンゲ

ルスが起草した『宣言』をそのまま受け入れた。そして、この『近世経済思想史論』の中で「いままでの社会の歴史は、すべて階級闘争の歴史である」と。これが五遍も六遍も繰り返されている。読者からすれば五回、六回繰り返されると印象極めて強くなる。

それでは日本の歴史は、どうなのか。

『宣言』の起草は一八四八年だが、マルクスもエンゲルスも日本のことはほとんど知らない。エンゲルスは語学の天才といわれた。しかし、日本語が読めたわけではなく、東洋の事は、あまり知っていない。

日本の天皇制のことも知らない。ロシアのツァーのことは知っていても日本人の天皇感情は知らない。『宣言』は一九二〇年代、当時の日本から七十年前のヨーロッパの空気を反映しているにしても、日本にそのまま適用できるのかどうか、河上大先生は、そこで少し考えてほしかった。

河上さんは、この本を出されるころ、『社会問題研究会』を出し評判であつた。信州の教育会が、河上の評判を聞いて講演を依頼した。信州のあと東京でも同じテーマで一週間、ぶっ続けの講演をした。その会場に岩波書店の編集の人がきていて、これを本にすれば売れるとい

い、本にした。

京都帝大教授、法学博士の肩書をもつ著名な先生の本が岩波から出ると、普通の本ではない。皆ありがたがって読む。ボクの先輩も河上先生の教え子で尊敬していたから、この本を読めと私の手に渡った、というわけ。

しかし、階級闘争一点張りは、私にはフに落ちなかった。

『共産党宣言』はマンチエスターやロンドンに住んでいたマルクス、エンゲルスが起草して、ヨーロッパの革命家が集まり採択されロシア語、イタリア語に翻訳された。だからヨーロッパの事情から階級闘争に力が入った。

階級闘争に力をいれると他の闘争が吹き飛んでしまう。階級闘争を否定するのでないが、それだけを日本で教えるとなると他の問題がかすむ。先に会場で、河上先生は女性の差別問題に触れることが少なかったという発言があったが、階級闘争に力を入れると、男女間の闘争が吹っ飛んでしまう。

とりわけ難しいのが民族の問題。ちょっとや、そっとではいかん。今日でも地球上、いたるところで悩んでいる。

私は年輩の在日朝鮮人にあうと、よく階級闘争の教え

を聞いて、どう思ったか聞いたものだ。資本家との闘争、それはそれでよいが、戦前の朝鮮人にとって民族が日本民族に抑圧されている。これは寝てもさめても忘れられない出来事であるハズなんだ。

一国一共産党だから朝鮮共産党はモスクワでは認められない。日本の共産党は階級闘争だけに一生懸命となり、民族の問題はあまりいわない。それはそれで、日本は支配する方だから苦痛が少ない。足を踏んでいるものと、踏まれているものの違いがある。民族問題に力を入れると、お前は民族主義者か、とレッテルを張られる。

当時の朝鮮人労働者は共産党宣言を叩き込まれていた。だから民族主義者といわれるのは、お前は心がけが悪いといわれるのと同じで、あまり「民族」のことを口にしないかったようだ。しかし、心ならずも日本人にされた朝鮮人の受けとめ方は違ったハズと思っている。

「人類の歴史は階級闘争の歴史である」と、河上さんは何度も書いた。私は、それにクビを横にふったが、なぜ、首をふったかだが、ボク自身の心の中にあるキリスト教がマルキシズムの階級闘争と相いれなかった。私は、キリスト者だが、仏教やヒンズー教や大本教などいろいろな宗教の中でキリスト教が一番いいからキリスト

者になったのではない。私の父や母がキリスト者だったので、幼児洗礼を受け、生まれながらのキリスト者にさせられてしまった。父親は、孔子さまではダメとキリスト教を選じたが、ボクは選択の余地はなかった。それに私の一族は叔父、叔母から、母方の祖父母までクリスチャンだらけ、キリスト教に十重、二十重と取り囲まれていた。

ところで、河上さんもイエスの教えに感動されている。そして、しばしば聖書の言葉を引用された。トルストイはイエスの教えから無抵抗主義を受け入れたが、河上さんは絶対非利己主義と受けとめた。己を殺して、無にして生きる、我無しの考えから思いつめ無我苑に飛び込まれた。

そのさい奥さん、子供さんはほったらかし、これが判らん。実家へ荷物のように送り返してしまう。しかし、この無我苑はおかしなところがあり、河上さんは少し考え違いをしていた。間もなく、それに気づかれ脱出される。

キリストの教えは、我れを無しにするといった、そんな怪しげなものではない。キリスト教の大事な教えは、汝の敵を愛せよ、である。カネ貸せといってきたら、な

けなしの財布を差し出してやれよ、と教えている。

河上さんは、その教えに感動された。

それでは、ナゼ、聖書に感動されながら、階級闘争に賛成されたのか、自叙伝に説明がなされていない。

大正時代のことは「幼稚だった」とあるが間違ったとはいっておられない。聖書が正しいとしながら階級闘争は間違いとは書いておられない。よくよく、マルクスにほれ込まれた。

無産階級のみじめな生活が気になって、気になって『貧乏物語』を書かれた。そのうちに、おとなしくしていては、いつまでも貧乏で泣かねばならないと、マルクス主義を主張されるようになった。

その変態のなかで、キリスト教への感動はどこへ行ったのか、それを自叙伝で書いてはしなかった。

民族問題の難しさ、これはマルクスもエンゲルスもわからなかったのかも知れない、河上さんの事から少し離れるが、『イギリスにおける労働者階級の状態』を書いたエンゲルスの場合、彼は大ブリテン島とアイルランドの間にある差別をあまり気にかけていない。双方の間は宗派も違い、互いに悪口をいいあってきたが、アイルランド人は貧しく、船でブリテンに働きに行く。エンゲル

スは、その光景をめずらしそうに眺めていた。『イギリスにおける労働者階級の状態』で、アイルランドの労働者は教養もなく技術もないから力仕事しかできず、したがって賃金も低い、と書いている。労働者を四段階に分け、一番低いのがアイルランドからきたもの、といっている。これは差別するつもりがなくても民族差別である。もう少し言えば、アイルランドから来た労働者はパン買う金がないのでジャガイモに塩つけて食っている。靴を買えず裸足で歩いている、そんな事を延えんと書いている。これは革命家らしくない言葉だ。

エンゲルスは晩年、自分の著書を読み返したが、訂正するところはないといっている。アイルランド人を軽蔑したことに気づいてもいない。

そのエンゲルスは、二十年間、紡績女工と同棲しているが、奥さんにはしなかった。日本の出版物にはエンゲルス夫人と書いているが、かっこが悪いから、そう書いている。彼女が死んだ時、マルクスに送った手紙でも『あの可愛そうな娘っ子が死んだ』と書いている。妻なら妻と書くだろう。

彼女の死後、こんどは、その妹とまた同棲している。妹とも結婚しない。だからエンゲルス夫人は存在しない。

別にかまわんでないかという人もあるかもしれないが、私には気になる。

その点、河上さんは身辺がきれいだった。お金もあったのだから祇園で遊ぼうと思えば遊べた。しかし、河上さんが祇園で遊べたら必ず、ボクの耳に入る。聞こうと思わなくても入ってくる。

だが、そんなウワサは一言もなかった。カゲ口をいわれる人でなかった。

しかし、私のいわんとするのは、河上さんも人間であるから間違いもあった。それを、河上会でいっさい言っではダメとすると、若い人は来なくなる。河上さんの欠点を大きな声で言う事もないが、時代の制約もあったし、日本の文化水準が低かったのだから河上さんを責めるのではないのだ、河上さんが自叙伝で「幼稚」といった、そういう時代であった。当時を振り返って今だから言えるということである。今日は、この辺で。

* *

大門英太郎・河上肇記念会世話人 和田君は友人だが今日は和田先生。河上さんに似ているところがあるナと話を聞きながら思った。非常に一面的で、一本気なところが河上先生に似ている。和田先生は、三高の同窓会で

問題提起をしたことがある。それは三高寮歌の「紅燃ゆる」、これがわれわれの青春か、三高を後にした時、青春は終わったのか、みんなどう思うか、と迫ってきた。和田先生はラディカルな意表を突くことをいうが、好漢なんだ。

ただ、河上肇記念会は和田先生が思っているように河

上さんを神様にしていない。マルクスもエンゲルスにも欠点もあることを知っている。この点は誤解しないようにしてもらいたい。したがって、どうぞ河上學説などの批判、問題提起をどしどしやっていただきたいと思っている。

(同志社大学名誉教授)



『全集』以後 (七)

杉 原 四 郎

た。

この複製版のことは、発行所が埼玉県であり、版權の所有者である勤労者生活擁護協会から関係者に頒布されただけで市販されなかったもので、一般には（とくに関西では）あまり知られていなかった（天野敬太郎『河上肇文献志』にも出てこない）。私も昨年末に東京の古書店の目録で見ではじめて知った。

河上が垂死の病床で延安から帰京した野坂参三にあてて書いたこの詩は、『全集』第二巻の一九七一―一九八頁にのっている。この詩は河上が「枕上浮雲」と題して一九四五年五月三日以降の詩歌を書きつづった手稿の最後にしるされているもので、日付は「二月十八日」となっている。校訂者の一海知義氏は、全集の底本となった「枕上浮雲」のこの手稿を野坂が所蔵する河上自筆の書―その写真は世界評論社版（四冊本）の『自叙伝』第三巻

一

野坂参三『同志河上肇絶筆の詩』（一九四六年五月三〇日、埼玉県・味燈書屋）を入手した。これは河上肇が一九四六年一月一七日に書いた。「同志野坂を迎へて」という直筆の詩―それは一九四六年一月二六日の野坂の歓迎大会で薄田研二が朗読した―を和紙に複製したもので、野坂が題字を書き、勤労者生活擁護協会常任委員の難波英夫が刊行の経過をのべた文章がそえられている。

難波によると、同協会の主催で一九四六年二月二三日に早稲田大隈会館で河上の追悼講演会が開かれた時、会場に陳列された河上の遺墨の中で最も来会者の注目をひいたのが、この詩であった。講演会後の懇談会で、この詩を複製して記念に頒布してはという話が出て、そこに列席していた味燈書屋の樋口弘がひきうけることになっ

と『河上肇遺品展図録』に出ている――とを比較して、両者の異同を注記している。

「同志野坂を迎へて」の詩は、『河上肇詩集』（筑摩叢書六七、一九七六年）の六八頁にもっている。本書は白石凡が『河上肇著作集』（第十一巻）所収の詩歌集を増補して編集したものであるが、ここにのせられているものは「枕上浮雲」の中にあるかたちでなく、末尾に「昭和二十一年一月十七日」としるされているように、それとは別のかたちのもの、つまり河上が野坂に贈った和紙に書かれたものであり、したがって味燈書屋版のものとはほとんど同じである。ただなぜ全く同じではなく、第一節の最終行は、ここでも「枕上浮雲」のもの、したがって全集版のものと同様に「声を揚げて喜ぶ」となっている、味燈書屋版の「涙を浮かべ声を揚げて喜ぶ」とはちがっており、他にも三ヶ所に字句の異同がある。そこで念のために、味燈書屋版の詩の全文を左にかかげておこう。

同志野坂を迎へて

一

同志野坂

新たに帰る

正に是れ百万の授兵

我が軍これより

更に大に振ふべし

刑餘老残の衰翁

龍鐘として垂死の床に危坐し

涙を浮かべ声を揚げて喜ぶ

二

われもし十年若かりせば

非才われもまた

筆を提げ身を挺して

同志諸君の驥尾に附し

澎湃たる人民革命の

滔天の波を攀ぢて

共に風雪を叱咤せんに

三

身は是れ葉末における露

落ちなむとして幸に未だ落ちず

けふのよき日に逢ふを得たれども

病臥すでに久しきにわたりて

体力ことごとく消え去り

気力衰へてまた煙の如し

遺憾なるかな

四

同志野坂

国を去りてより十有六年

万里を踏破して

再び帰り来るの日

空しく病床に臥して

思ひを天下の同志に馳せ

切にその奮起を祈りてやまず

昭和廿一年一月十七日

河上 肇

年六十八

同志野坂

恵覽

「枕上浮雲」では各節のはじめについていなかった数字が一月十七日付けの詩では一、二、三、四とつけられ、また前者では各章とも七行の構成だったのが、後者では一の第一行目が「同志野坂」と「新たに帰る」との二行にわかれ、一だけが八行になったことが形式上のちがいである。冒頭の第一行が「同志野坂」に改められたのは、四の第一行がふたたび「同志野坂」とあるのに呼応する

ためであろうか。

二

今回紹介する河上の三通の書簡は、大正十三年に河上の門下生である池之端穠（しげる）へあてたもので、本会の会員で穠の兄の孫の甚衛氏から提供された。池之端穠は、岐阜県の出身で東大農学部を卒業後宮林署の所長になったが、河上肇の講義を聞くために京大経済学部に入學し、一九二四（大正一三）年卒業し大阪市役所に勤めた。同期の卒業生には赤松五百麿、樫原信一、中川与之助らがいる。書簡は彼の就職先に関するもので、河上が門下生の将来についてこまかい気をくばっていたことがよくわかる。

(1) 手紙

拝啓 六月三日朝御認めのお書面轉送し来り今日拝見いたしました。世間的の謂ゆる「出世」を御希望でさへなくば、市役所の調査の御仕事は、同時に理論的の眼を養って行かれる限り、一経済学の研究のためには、高〔等〕農林よりも大分より善い御仕事だらうと存じます。市場の調査も非常に面白いだらうと思ひます。もしその御仕事が大分継続的に行はれるものなら、あなたの今後

の研究問題をしばらくそこへ定めておかれるのも、結構だらうと存じます。「市場ノ研究」は立派な一つの題目であると考へます。関博士は以前からの知合ですから、もし何か御入要の折もあれば、私から紹介状なり依頼状なりを出して差支ありません。

御赴任後も大阪ならば時折お目にかかることも出来まじやうし、それに大原の研究所がありますから、総てにおいて御研究のためには、ギフよりもより好都合だと、その点はよろこばしく思ひます。

一週日前から当地に轉地してゐます。あなたの論文は京都においたきりにしてゐます。惡からず御ゆるしのほど切に願ひ上げます。

不取煎右御返事まで 匆匆不一

河上 肇

池之端君侍史 六月八日

河上は当時和歌山に轉地療養していたので、この手紙は、和歌浦望海樓から京都市北白川小学校前の池之端に出された。池之端の郷里の岐阜に高等農林学校が開設されることになり、そこへの就職について河上に相談してきた手紙が京都から和歌浦に転送されてきたわけである。「関博士」というのは、当時の大阪市の市長だった関一

のことで、河上は関が東京高商の教授だった頃からの知り合いで、彼は一九一二（大正元）年に関との間で唯物史観に関する論争をしている（『全集』第五卷参照）。

(2) 葉書

六月十一日附のお手紙拝見いたしました。御転住のよし、しかし大学院学生としておいでの間は、御承知の通りの規定がありますゆへ、誰かにお頼みになって京都の方における御住所もお定めの上それを大学の方へ届けておいて下さる方が好都合と存じます。雑誌の発送や大学からの通知などの宛所が京都になつてゐることが必要だらうと考へます。あなたの御研究の方針についてはまた七月に入ってからお目にかかつてゆっくり御相談したいと思つてゐます。紹介状ももうすこしあとに致しますから、もしそれ迄に御入用であつたら一寸御催促を願つておきます。

六月十三日

これは和歌山から大阪市東区清水谷西ノ町二四二川上方池之端穠にあてたものである。「雑誌の発送」とは多分京大経済学会の『経済論叢』のことを指すのであろう。は経済原論を専攻するために当時大学院に在籍していた。

(3) 葉書

拝復 御葉書轉送し来り只今拝見いたしました。私はモウ京都へ帰ってゐます。日曜日に御光来の由承知いたしました。先は右御返事まで 匆々不一

京都にて

河上 肇

これは京都の河上から大阪の池之端に出された葉書で、日付けはないが、聖護院郵便局の消印は一三・七・一八のように讀める。五月二九日からの和歌浦滞在から河上が帰宅したのは、六月の末のことであつた。

池之端は大阪中央卸賣市場長などを歴任して一九四五年三月に大阪市役所を退職、一九七五年六月に八五才で歿した。

三

『山口民報』の今年一月一日号(週刊、第一六六三号)は河上肇の弟河上左京(一八八九—一九七一)の生誕百年特輯号である。一頁に「岩国の生家を訪れる」という無署名の文章と左京の水彩画の作品二つ——「静物」という一九二三年頃のもの、「魚」という一九二九年頃のもの——と岩国市錦見七丁目の左京の生家(いまは長男の荘吾氏の御一家の住居)との写真がのっており、六頁に

「楠の木」という年代不明の作品の寫真、左京の遺影、略年譜と河上莊吾氏の「父のぬくもり」という文章が、そして七頁に高田美規雄「河上左京と水彩画」がのっている。

『自叙伝』の中には、「私と比較にならぬ丈夫な骨格と体力を有っている」「生まれるときから私がよく面倒を見てゐた」「私と十歳下の末弟左京」のことが、まとまつのべられてゐるところはないが、随所に出てくる。この兄弟の間が深い愛情で結ばれていたことは、本来自分に向いていない政治活動で苦勞している自分を左京があたたかく包んでくれている様子をのべたくだり(全集続5、三九五、四二〇、続6、二五八頁など)を読めばよくわかる。また『全集』完結後に出た一海知義編『河上肇獄中往復書簡集』(岩波書店、一九八七年)には、獄中の肇と岩国の左京との四年間の往復書簡(肇↓左京が約二〇通、左京↓肇が約三〇通)がおさめられているが、それらは、この左京の岩国通信が肇のどんなに大きな心の支えになっていたのかをしめしている。一九七九年に出版された『河上左京画集』とこの『往復書簡集』とは、共に、河上左京という人物を私たちに近づける上に大きな貢献をした。

左京は、時にはスケッチ入りの封書で、時には絵葉書で老母の近況や故郷の風物とともに、自分の画業のことを報告している。また一九三五、三六、三七年の正月には亥、子、丑のデザインの手づくりの賀状で兄を愉しませている。

左京が獄中の兄に出した最後の通信は一九三七年一月二三日のもので、一月七日に一家でとった写真とその説明である。老母を中心に左京夫妻と二兒と手伝いの六人が玄關を入った所の縁側で寫っている（下巻三五八頁）。左京の説明によると、母がその上にすわっているぶあつい座ぶとんは、須磨の叔父河上謹一から贈られた紅絹のものである。肇はこの寫真をみてつぎのような歌をよんだ。出獄の日まであと五ヶ月たらずとなった一九三七年一月末のことである。

世の中は嵐吹き吹く冬ながら母のすがたののびやかなるかな

有りがたやいとすこやかに見え給ふ七年ぶりの母のおもかげ

坐蒲団の厚きぞうれしうつし絵の母上坐せる坐蒲団厚し

夏されば縁にならびてわれもまたたらちねの母と写真

うつさむ（同三六七頁）。

後記 本稿を草するにあたり、河上莊吾、池之端甚衛、また一海知義、細川元雄の諸氏の御教示をえた。記して謝意を表する。



中国訳目録稿 (五)

一海 知義
米 浜 泰 英

12 マルクス主義のために

一九二九(昭和四)年四月一日、希望閣発行。四六判、序一頁、本文一二五頁。

発売約一月後の五月四日発禁となり、伏字を追加した改訂版が六月一八日に発行された。四六判、再版への序言一頁、初版への序言一頁、本文九九頁

② 新経済学之任務

銭鉄如訳 一九三〇年三月初版 上海、崑崙書店発行
訳者声明二頁 目次三頁 本文八六頁 定価大洋三角
本訳書は改訂版から翻訳している。

「訳者声明」の和訳をつぎに掲げる。

「一、本書は日本の河上肇博士の著書『マルクス主義の

ために』の改訂版を訳出したものである。原書は以前ある雑誌に掲載された二篇の論文を集めたものであり、いずれもマルクス主義への非難に対する回答である。第一篇の原題は「マルクス経済学のために」であり、土方氏の「マルクス主義の克服」に対する回答である。第二篇は「経済と権力」で、高田氏の「勢力説」を批判したものである。本書はわずか三万余語の小冊子であるが、新経済学の根本的見解と究極の目的を極めて生き生きと描き出しており、一読すれば、新経済学と俗流経済学のいづれが真理に接近しているか、俗流経済学にとって新経済学がまことに「一の苦悶であり、恐怖である」ことがわかる。第一篇の結語で、新経済学の「使命はそこにこそある」と述べられているが故に、訳者は本篇の表題を

改め、「新経済学の任務」とし、それをまた本書の書名にも用いた。

一、第一篇の第一段は著書が筆を執った由来を述べていて、まだ本題に入っていない。また、第二篇の前半一一頁（原書について言う）は、非凡を自負する高田氏のいわゆる「いかなる人もいまだかつて捉えたことのない真理」である「勢力説」をとりあげているが、この説は五十余年前にすでにデューリングが唱えた旧説であり、経済と権力の関係を提起したものでない。よってこの二つの部分は省略して訳出しなかったが、原著者には大変申し訳ないと思っている。

一、原著第二篇には二、三箇所であるが、伏字が随分多いところがあった。訳者は浅学非才ゆえ、敢えて然るべき文字でもってそこを補填することはやめ、訳を省略して「……」の符号で示した。読者のお赦しをいただきたい。

本書の初版を北京大学図書館、北京図書館が所蔵する。

13 資本論入門 第一卷上冊

一九二九（昭和四）年四月五日、弘文堂書房発行。四六判、序言七頁、目次六頁、本文四九二頁。

本書は一九二八年三月から二九年二月にかけてパンフレットの形で発行した『資本論入門』第一分冊から第八分冊までを一巻に纏め、それに大幅に加筆修正したものである。

②③ 資本論入門 第一卷上冊（二分冊）

劉楚平訳第一分冊には「資本論入門第一卷上冊」とあり第二分冊には「資本論入門第一卷上冊之二」とある。両分冊ともに奥付けは一九二九年九月一五月初版

上海・晨曦書社発行 第一分冊は総目次五頁 訳者弁言二頁 本文頁数未詳（第一章の第三「労働価値説に対する異論の分析」まで）。第二分冊は目次はなく第四「商品で表示される労働の二重性」から始まり、第二章「交換過程」の末尾まで。通し頁で第二分冊の末尾は一九一頁。初版一〇〇〇部 定価、第一分冊は大洋八角五分 第二分冊は六角

「訳者弁言」の和訳をつぎに掲げる。

「マルクスの学説を研究した人なら誰しも、『資本論』第一卷第一篇の「商品と貨幣」は、『資本論』全体の最も基礎的な部分であると同時に、また最も難解な部分で

あることを知っている。このため、一部の『資本論』読者は、きまってそこで悶^もえて手を引いてしまいが、これは実際遺憾なことである。

日本の河上肇氏は世界の『資本論』研究者の中でも最も深い理解者の一人であるが、最近一冊の『資本論入門』を著した。著者は完全に科学的立場に立って、客観的な眼で『資本論』第一巻第一篇「商品と貨幣」に詳しく行届いた解説をほどこし、読者を正しい方向へと啓発している。(本書は第一篇の解説をまだ最後まで終えていないが、河上氏の原序によれば、今後も続行されるそうである。)これは確かに世界でもまれにみる名著で、とりわけ『資本論』にとり組む勇気のない人にとっては、より重要であり、欠かせないものである。

今日の、何もかもが荒涼と感じられ、何もかもが浅薄に感じられるわが中国において、本書を紹介することは、学術面でも文化面でもまったく意義のないことではないであろう。ただ、私の訳にはどうしても晦澁な部分があるが、読者諸氏がどうかそのために気を悪くされないよう希望する。もし御指正を賜るならばこれにまさる感激はない。

なお最後にお断りしておく。原書は頁数がひどく多く、

ほぼ二十万語に達する。印刷の関係でやむを得ず二分冊に分け、ひき続いて出版することになった。読者の御了承をお願いする。

上海にて 訳者

本書の二分冊を北京図書館が、分冊の前半を北京大学図書館が所蔵する。

②④ 資本論入門(上、下二分冊)

仲民訳 上冊は一九五九年五月初版、一九六二年五月第三刷 下冊は一九六一年一月初版 生活・読書・新知三聯書店(北京)発行 上冊は序二頁、跋一頁、目次五頁、本文五五七頁 訳后記一頁(「序」「跋」はいずれも原著の翻訳) 上冊の第三刷には印刷部数「二、五〇一二〇、五八〇」とある。

上冊の奥付けに次のような注記がある。

「原書は全五分冊で出た『資本論』第一巻の解説者である。中国語版は上下二冊で出版する。この上冊は日本の青木書店から一九五一年に出版された第一分冊と一九五二年に出版された第二、第三分冊の翻訳である。」(上冊は第三篇「絶対的剰余価値の生産」の終わりまでを収録)

また「跋」には次のような訳者の注記がある。「この文章は河上肇先生がご自分で保存されていた本書昭和七年一月五日版の表紙の裏に自筆で書きつけたものである。青木文庫版はそれを第一分冊の扉の裏に印刷し、合わせて校訂者の説明を付した。訳者はこの文章は有益な跋文と判断したので、それを序言の後に並べかえたうえ「跋」という標題を冠した。―訳者―（この「跋」は「この著書は私が公にし得た最後のものであり……」ではじまる文章を指す。河上肇全集第二一卷「識語」の項・五二七頁に収録。）

下冊は一九六一年一月初版 目次三頁

本文頁数未詳。奥付けに「この下冊は日本青木書店から一九五二年に出版した第四、第五分冊に拠った。」の注記がある。（下冊は第四篇「相對剩餘価値の生産」から第七篇「資本の蓄積過程」までを収める。）

上冊は一・六五元、下冊は〇・八七元。

上冊の末尾に付された「訳后記」（訳者あとがき）の和訳をつぎに掲げる。

「（一）本書は、日本青木書店より一九五一年に出版された第一分冊と一九五二年に出版された第二、第三分

冊に拠って翻訳したものである。この版本は堀江邑一氏が校訂し、また旧版の伏字を起こしている。校訂者は起こした伏字にすべて引用符号を付しているが、訳者はこの種の引用符号は読者に必要がないと思うので省略した。

（二）青木書店版では文中に要点をまとめてゴチックで窓見出しを挿入している。これは校訂者の堀江邑一氏が加えたものだが、読者にはある程度便利なので、訳文中にそのまま残した。

（三）著書が本書で引用している『資本論』の文句は、すべてカウツキー版から引いているが、カウツキーの犯した誤りを避けるとともに、読者が『資本論』を参照する際に便利なように、やむを得ないところを除いては、引用文はすべて郭王氏の訳本に依据し、その訳本の頁数を明記した。

（四）本書の引用文中にしばしば「」が挿入されているが、そのなかの文句はおおむね河上肇氏が加えたものである。そのいくつかには「河上補」の注記があるものもあるが大概注記はない。

（五）訳者は訳文を再三推敲したが、能力に限度があり、誤りは恐らく免れないと思う。読者の御指正をいただきたい。」

本書上冊の初版と第三刷を北京大学図書館が、上冊、下冊の初版を中央編訳局が所蔵する。

14 マルクス主義批判者の批判

一九二九（昭和四）年一月一七日、希望閣発行。四六判、序二頁、目次二頁、本文三一二頁。

②⑤ マクス主義批判者之批判

江半庵訳 一九三〇年初版 上海・申江書店発行 本文二五六頁

上海図書館所蔵の本書は、前半部分本文一六頁までが欠如しているため、詳細がわからない。

②⑥ 唯物弁証法者の理論斗争

江半庵訳 一九三一年一月五日改版上海・星光書店発行 原序二頁 目次二頁

本文二五六頁 発行部数二〇〇〇 定価七角

②⑤と同一の訳者であり、本文頁数が同じ、表紙のデザインも同一なので、②⑥の改定版と思われる。訳者の序・跋はない。

原著のうち「反動学派の陣営における窮余の一戦術と

しての事実の虚構——拙訳『資本論』に対する福田博士の非難について——」「我国における歴史学派の擡頭」および「学生検挙事件について——和辻哲郎氏に寄す——」の三篇は本書では省かれている。

改版を上海図書館、北京図書館が所蔵する。

15 マルクス主義経済学の基礎理論

一九二九（昭和四）年二月二五日、改造社発行。四六判 著者肖像一枚、序・目次・本文（通し頁）六四四頁。〈経済学全集〉シリーズの第八巻。

②⑦ マクス主義経済学基礎理論

李達等訳（上篇は李達・王静・張栗原訳。下篇は錢鉄如・熊得山・寧敦五訳） 一九三〇年六月一日初版上海・崑崙書店発行 原序二頁 目次六頁 本文上篇三二〇頁、下篇四〇二頁 定価上製三元 並製二元五角

訳者の序・跋はない。目次・頁数からみて原書の全訳である。

初版を北京大学図書館、北京図書館、復旦大学図書館が所蔵する。

16 第二貧乏物語

一九三〇（昭和五）年一月一日、改造社より雑誌『改造』二巻二号の別冊附録として発行。四六判、序二頁、目次四頁、本文五〇四頁。

②⑧ マクス主義経済論初歩問答

潘敬業訳 一九三三（民国二十二）年四月初版、華北編訳社発行 編訳者序言二頁 目次二頁 本文一一八頁 定価洋四角半

本書は原著の「十三 資本主義的社會の細胞としての商品の分析」から「十九 資本主義社會の行き詰まり—その必然的崩壊」までを訳した抄訳である。

「編訳者序言」の和訳をつぎに掲げる。

「マルクス主義経済学と資本家階級の学者の経済学とはどちらがうか？マルクス主義経済学の内容はどのようなものであるか？普通の初学者はこうした疑問を追及していつて、大部の『資本論』を抱かえて読んでみる。わからない。そこで『通俗資本論』『資本論解説』……をとり出して読む。しかしやはりほとんどわからない。結局のところ、即座にマルクス主義経済学の内容を理解でき

るすべはない、ということになる。わけても、労働者大衆の大部分は、マルクス主義の経済学というのは、自分たちのために書かれたものであり、資本家の彼らに対する搾取関係を理解させるものだ、ということを知っている。ところが、今日の中国の出版界で、労働者大衆がマルクス主義経済学を理解するのに適した書物を見つけないのは至難のことである。こうした要求に応えるために、私は河上肇博士の著書『第二貧乏物語』のなかから一部分を訳出してこの小冊子を編んだ。原文は河上博士が労働者に向かって語る口調で書かれているため、通俗、明快であり、極めて理解しやすく、一般の初学者や労働者大衆が読むのに適している。（原文中にとりどころ日本のことと著書個人のこととが語られているが、翻訳の際に、原書の主意を妨げない範囲内で、その一部分をカットした。つまり「編訳」とした意味はこのことを指している。）

多忙で極めているさ中での編訳であるため、原書の文章はたいへん通俗・明瞭であるにもかかわらず、誤訳している箇所が多々あるにちがいない。読者諸君の忌憚のない御指正を希望する。

友人楊君がこの本のために表紙を画いてくれた。特に

この場を借りて謝意を表する。

河上博士が日本帝國主義政府の不法な檢挙にあつて後、偉大なるマルクス五十周年祭を前にして、この小冊子が中国の一般大衆と對面するのは、実に記念すべきことである。

一九三三年三月 北京太平湖畔にて

本書の初版を北京大学圖書館、中央編訳局が所蔵する。

② 新社会科学講話

雷敢訳 一九三六（民國二十五）年四月初版 樸社發

行 原序二頁 訳者序二頁 目次二頁 本文三三六頁

定價大洋一元

本書は原著の「附録の一」「附録の二」が除かれているほかは、他はすべて訳出されている。

「訳者序」の和訳をつぎに掲げる。

「本書の著者河上肇博士は、日本の新興社会科学界のリーダーである。博士のこれまでの著作はきわめて豊富で、わが国の人士によって翻訳紹介されたものでも十余種を下らない。陳豹隱氏訳の『経済学大綱』、李達氏訳の『マルクス主義経済学の基礎理論』、郭沫若氏訳の『社会

組織と社会革命』等はいずれも人口に膾炙し、一世を風靡した。本書は博士が不幸な事件に遭遇する前の最後の作品であり、思想の積極性、その成熟ぶりは、これに先だつ諸著作の及ぶところではない。

本書は大きくいって二つの部分に分けられ、前半部分は、新唯物論を明らかにする。わかりやすい實際の例をあげて唯物論の客観性と實際性を解釈し、今日唯物論を談ずる人たちの画一・空虚の弊をつとめて是正しようとしている。博士自身言う「私は最初からのマルクス主義者でもなく、また簡単に唯物論者となりえたものでもない。」「世界戦争の真最中に、ロシアにおける革命の前夜に、倫理的宗教的空想に溺れていた」。博士は觀念論者から唯物論者へと転化するのに「畢竟四分の一世紀を費やした」。私たちは、彼の思想の進歩が、全く経験の蓄積とかの真理追求の結果によるものであることをここに見てとることができる。本書の後半は對話体を用いて、極めて巧みな方法で新経済学の体系を解釈している。博士はさすがに経済学の専門家だけあって、ここで、最も経済的な無駄のない文章でもって最大の効果を發揮し、本書の中でも一番精彩に富んだ部分となっている。

著者に対して、訳者は一貫してかわりない敬慕の念を

抱いており、翻訳の筆をとるときも虚心慎重を宗とし、原意を失わないようつとめてきた。ただ学力の浅いために誤りを犯すことは避けられないであろう。読者諸君が御指教を吝まれず、改正の機会に恵まれば幸甚である。

一九三六年四月

北京にて 雷敢

本書の初版を北京大学図書館、北京図書館が所蔵する。

17 資本主義的搾取のカラクリ

一九三〇（昭和五）年二月三日、同人社より「労働者パンフレット第二号」として発行。四六判、四五頁。

③〇 通俗剰余価値論

鍾古熙訳施復亮校 一九三二（民国二十一年）六月三日初版 上海・神州国光社発行 目次三頁 本文頁数未詳 定価大洋一角

訳者の序・跋はない。原書には章節の区分は一切ないが、訳書では二一節に分け、それぞれに見出しを付している。

本書の初版を上海図書館が所蔵する。

18 自叙伝

一九四七（昭和二二）年五月三〇日～四八年三月五日、世界評論社より四冊本で刊行（A五判）。一九四九（昭和二四）年四月三〇日～八月三〇日、世界評論社より前記の四冊本を五冊本の普及版として刊行（四六判）。一九五二（昭和二七）年六月一五日～一〇月一五日、岩波書店より前記世界評論社版五冊本を底本として五冊本で刊行（新書判）、各冊の末尾に第三者の文章を付す。

③1 河上肇自伝（上、下二巻）

儲元熹訳 龍仁校 上巻は一九六三年七月初版 下巻は六四年九月初版 北京・商務印書館発行 上巻は目次、本文通し頁であるが頁数未詳、下巻は目次、本文通し頁であるが、頁数未詳上巻、下巻とも定価二・八〇元 ともに二〇〇〇部印刷

本書の表紙には「内部読物」と印刷され、扉には「本書は内部の参考用に供するものであるから、文章に引用するときは必ず原文と照会し、出処を注記するときは、原著の版本によっていただきたい。」と記されている。

本書の初版を北京大学図書館が所蔵する。

〔完〕

追悼 大塚英子さん

小 嶋 康 生

「日中」のことで日ごろ、お世話になっている関西国際旅行社取締役相談役の国光昭二さんと新年早々に懇談する機会があった。国光さんは多くの方は御承知かと思うが、大塚有章さんのご長男である。ビールの馳走を受けながら、幼いころの河上博士の思い出などをお聞きた。

ひと区切りしたところで、大塚有章夫人英子さんのおかげんをお伺いした。国光さんはテーブルに目を落とされ「実は、この正月二日に亡くなりました」と小声でおっしゃった。びっくり驚天である。

英子さんは河上博士の夫人秀さんの弟（有章さん）の奥さんであり、有章さんと『未完の旅路』を歩かれてきた。有章さんが病い倒れられた後、その看病疲れもありダウン、その後、長い入院生活が続いていた。新聞に訃報を書けなかったことで申訳なく思ったが、「いや母は

生涯、父の黒衣で表に出る人ではありませんでした。だから身内だけでとむらいました」と言葉少なめに語られた。

しかし、訃報を後刻に知って驚いた人は多かった。ぜひ、お別れの挨拶をさせてほしいという希望も相ついだようだ。そこで、改めて告別式が一月十六日、宝塚市山元の毛沢東思想学園で行われた。今日では世界で唯一つ毛沢東の名を掲げる、この学園は大塚有章さんが最後の活動拠点にされたところで、英子さんはわが家とおっておられたようである。英子さんは一九〇四年、山口生まれ。実父は三十二歳で国会議員になった山口県指折りの名門で、英子さんは恵まれた環境で育った跡取り娘だった。しかし、有章さんとの結婚後、波乱な人生が始まった。

銀行員だった大塚さんが運動に入ったのは国光さんに



よると、河上博士の影響もさることながら、早稲田での恩師、大山郁夫に応えるためであった。大山選挙応援で検挙されたあと銀行マンの職も失い、婿入りしていた名門の国光家とも離縁となる。そのけじめを有章さんの方からつけたが、英子さんは、いつも黙々と、その後に従った。

告別式で、「明治の婦人の美德」が語られていたが、上流階級出身の方だけに戸惑いや苦勞が大きかったことは確かだろう。住まいも転々、下町のけじめした八軒長屋（東京）など地を這う生活が続いた。出獄した同志が、しらみと共に転がり込んでくるため、幼な子のため冬でもカヤをつっていたという有名な話もあるほど。みかねた国光家からの仕送りも同志のお腹の中に入っていた。

難は続いたが、それでもグチや弱気は一度もはなかった、と国光昭二さんは母を賛える。時には気ままにふるまう有章さんにひと言の異論もはさまず、その後をしたがった、という。そして、異国の地で戦後十一年の暮らしが続く。

河上秀さんと大塚英子さんが互いに亭主のことを、どう語りあったか、その「証言」がほしいところだが、今

となつてはかなわぬことである。「明治の女」とか「武士の妻」という時代がかった表現が告別式で聞けたが、国光さんによると、英子さんは大塚家「陰のオーナー」だったという。有章さんが、あちこちで「突進」できたのも後顧の憂いがなかったからで、「陰のオーナー」説

を成程とうなづいた。

英子さんは、有章さんが眠る法然院に葬られる。河上博士墓参のさい大塚夫妻の墓にも手向けあらんことを乞い願う。

合掌

井上喜代松氏をいたむ

沖 本 彰

一九八九年三月二九日、井上喜代松氏が、大阪の上二病院でなくなられた。井上氏は古くからの記念会の会員で、毎年法然院での総会には必ず出席されていたが、昨年十月十六日の総会ではお目にかかることが出来なかった。また、音読会には第二期から参加され、西宮の仁川の自宅から京大病院前の教育文化センターまで約八年間にわたって通って来られ、熱心に『貧乏物語』や『自叙伝』を音読され、講師の話に耳を傾けられたのであった。しかし、第八期中途で次のようなお葉書をいただいた後は欠席が多くなり、第九期には参加されなかった。

「……最近少々健康を害しまして音読会皆出席はできないかと思ひますが年間会員にはさせていただきます……」

(八七年十一月五日付)

井上氏と河上博士とのかかわりあいには、氏が八五年度の総会でふれておられるが、二〇才の頃から『経済学大綱』等を読んで著作に親しまれ、また義兄(鮫島麟太郎氏)が吉田に住んでおられたので河上宅によく出入りされていたとのことである。全集別巻一〇九頁には河上博士から鮫島氏宛の書簡が掲載されている。

『赤旗』四月二日号によれば、井上氏は戦前からの活動

家で、京都消費組合や京都染物労働組合の書記長をされ、三六年に治安維持法で検挙、投獄。戦後は東和企業組合、国民救援会、旧友クラブ、新日本歌人協会等の役員を歴任されている。

秋の記念会総会、音読会の墓参会、遺跡めぐり、岩国の生家訪問等の諸行事には積極的に参加されたが、その際よまれた数首を紹介して、井上喜代松氏を偲びたいと思います。

—河上博士の命日墓参—

稍より雪おつる日に墓参する

瘦せし博士は身をぢまさん

碑の建ちて古りにけり博士への

編集後記

一

『自叙伝』上、中、下（全三冊）が岩波書店より本年一月〜三月に発行された。これによって『全集』でしか読めなかった新版本が、単行本として入手でき、読めることになった。そして、河上肇をまず知ってもらえるこ

弟子らの敬慕胸にしみくる

—遺跡めぐりから—

彫り深き万葉仮名のいしぶみに

博士の筆を偲ぶおそ秋

重厚なる卓に博士も坐しましし

いま進進堂にわれらも囲む

—生家を訪ね—

漸くに郷土の誇りとなりけらし

河上像は顕官と並ぶ

住職の打つ金子かねの音大きければ

遠き博士の靈にとどけよ（長久寺）

とができ、新しい読者が増えることとたいへん喜んでい
る。『全集』版の『自叙伝』は、解題によると、最終稿
を底本とし、世界評論社版、岩波書店の新書版・文庫版
など従来の刊行本の誤記、脱落部分を補充し、誤って置
かれたものを正しい位置にもどし、しかも新たに「祖父
河上才一郎」と「祖母天寿院の半生」、新発見の随筆
「信州移住の夢」が加えられている。今回のものは、す
べて内容は『全集』版そのもので、ただ校異が省かれ、

口絵が数葉加えられている。『全集』を入手できなかった会員諸氏には是非一読を推奨する。

二

今年は、京都大学経済学部創立七十周年に当たります。一九一九年（大正八年）四月、河上肇は父宛に「過日経済学部独立の要件にて総長及学長に従ひ文部省に出頭の爲め上京仕りて帰洛仕候」と手紙に書き、また櫛田民蔵に「経済学部独立問題の爲め毎日朝夕に至る迄時間を費やし居り、夜に入りては筆を執るの元氣も無之、段々御無沙汰致候。学問に苦心致候と違い、事務上の事は不慣の爲めにや疲労を感じる事甚しく候」と書き送っている。（同様の内容を小島祐馬宛にも）これは、河上が京大経済学部創設に大いに尽力していたことを物語っている。

三

過日、0氏から京大河上祭の写真数葉を見せてもらった。そのうちの一葉に、法経第一教室に河上の肖像画と講演の掲示が掲げられた会場風景があった。編集子はその講演テーマと講演者の中に「河上肇と魯迅——竹内好氏」とあるのに注目した。竹内ファン（？）であったこともあり、そこで竹内は何を語ったかが私の関心をひい

た。河上と竹内、魯迅という問題関心は、今まで私には全くなかった。（もちろん『竹内全集』を読み飛ばしてしまったのであろう。）

『竹内全集』年譜には、一九五四年（昭二九）一月三〇日（三一）日、京都、河上肇祭で講演とあるが、講演内容に相当する論文はない。そこで『全集』索引により、河上肇を引くと、三カ所あった。一番目は、「転向と抵抗の時代」の中でふれたもので、戦時下、活字にならない文学形態の存在を指摘し、そこで「老学者河上肇が『自叙伝』や『獄中記』や『思い出』を書きためていた」と。二番目は、光吉悦心著『火の鎖』の書評で、冒頭の光吉さんの写真から、中年の頃を内田良平に似た精悍さを感じ、七十歳代から八十歳代に近い頃を、「いくらか晩年の河上肇に似た村夫子然とした飄逸さがあらわれていて、たいへんおもしろい。なるほど、この人もいく山河越えてきたんだな、という感じが自然にする」と。三番目は、六四年の竹内日記にあり、小泉信三の新聞寄稿文に反対し、「私の力で小泉さんの考えを変えさせることはできない。また、小泉さんから社会的影響力を奪うこともできない。小泉さんの背後にある国体論の重みが私にのしかかり、その途方もなく重い力が私を押しつぶ

すような気がする。」そして北一輝とともに河上肇を登場させ、彼らも押しつぶされた、「やんぬるかな」と記している。

以上では、竹内好がもっている河上像を知ることにはできない。まして魯迅との接点も。（もちろん私の不勉強はある。）それでは、その解明に、講演記録を文章に残さなかったこと（何を書かなかったかという問題）と人間的好みの問題としての竹内好にまでたどり着く作業を課せられるような気がして、『竹内全集』を取り出したことに私は後悔しはじめた。

* * *

編集子の全く個人的事情で、会報の刊行が遅延しましたこと深くお詫び申し上げます。組織でありながら組織的対応をしなかったことと反省しております。

十一月には、河上肇生誕百十年の記念講演会が創立七十年に当たる京都大学経済学部を会場として準備されております。会員諸氏の多数の参加によって本会の活動を盛り上げてほしいと思います。

（細川 記）

（表紙は、東京農科大実科明治三十六年卒業写真に写っている河上講師）

河上肇記念会 会 則

- 一、この会は河上肇記念会と称し、大阪市（または京都市）に事務所を置く。
- 二、この会は、河上肇先生の人格とその業績を讃え、これを広く、かつ永く伝えるための研究ならびに事業を行う。
- 三、河上肇先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人びとを会員とし、いかなる資格ならびに政治的立場を問わない。
- 四、毎年一回総会を京都で開き、その他随時集会および事業を行う。
- 五、この会の会友および世話人は別の定めによって選び、総会において承認を与える。
- 六、世話人代表はこの会を代表し、世話人中の事務局担当が事務を執行する。
- 七、この会の経費は、会費ならびに寄付金をもってあてる。
- 八、会費は年額三〇〇〇円とする。
- 九、この会則の改廃は総会の議決による。

入会のすすめ

河上肇記念会は、関西を中心として正式に発足して満十五年になります。毎年秋には、河上の墓前に集まり、法然院にて法要を営み、会の総会を開いております。会員の資格は会則にある通り、河上先生に学び、先生を知ろうとする人びとです。是非ご入会をおすすめします。

会員の皆さまには友人、知人にこの会をご紹介下さい。



会報(回覧雑誌)

転居通知のお願い

転居、住居表示変更などのあった場合は事務局へご一報下さい。

〒五四二 大阪市南区島ノ内一―二〇―一九

(丸善石油ビル) 千代田商事株式会社内

河上肇記念会



貧乏物語 初版

〒 542

大阪市南区島ノ内一―二〇―一九 (丸善石油ビル)

千代田商事内 河上肇記念会

電話 (〇六) 二五二―三六九六

振替口座 大阪 三二三一九五

